

地域コミュニティにおける ドキュメントコミュニケーションに関する一考察

秋元良仁¹ 加藤健介¹

概要: 市民が公共サービスを提供する場にコモンスペースがある。コモンスペースが円滑かつ活発に運営されるために、コミュニティへの参加意識を高めるドキュメントの役割に着目している。そこで、コモンスペースである国立本店での活動を事例に、コミュニティに対する人々の態度や意識を示すコミュニティ意識尺度への適用可能性について基礎的な検討を加えたのでその報告を行う。

キーワード: コモンスペース, 地域コミュニティ, ドキュメント, コミュニティ意識尺度

A Study on Document Communication of Local Communities

RYOJI AKIMOTO^{†1} KENSUKE KATO^{†1}

Abstract: There is an environment that can be supported public services by citizen. Common space is a community that needs to be actively managed. In such a situation, it is necessary the document that encourage people to participate in the community. In this paper, we summarize the activity of common space "Kunitachi Honten", and then, we describe possibility of application by community consciousness scale.

Keywords: Common space, Local community, Document, Community consciousness scale

1. はじめに

近年、市民が地域性やニーズに即した公共サービスを提供する取り組みが広がりを見せている。中でも、誰でも気軽に立ち寄ることができ、個人が思い思い過ごせる場として、コモンスペースが注目されている[1][2][3]。

コモンスペースとは、通常であれば行政が公共サービスとして提供する集会所、展示場、図書館、公民館といった場を私営する建築空間を指す。コモンスペースでの活動は行政が提供する公共サービスと比べ、小規模なサービスであることが多いが、設営者や運営者による「地域の居場所」や「まちづくり」としての視点が盛り込まれた空間として設計されていることが多い。

コモンスペースは地域住民のみによってつくられる事例もあるが、「地域の居場所」や「まちづくり」そのものに興味があったり、あるいは、コモンスペースが持つ設営コンセプトに興味を持ったりする、多様な人々で構成される場合がある。後者の場合、コモンスペースが円滑かつ活発に運営されるためには、参加者の共通理解としてのドキュメントの活用が必要不可欠になる。

筆者らは、コモンスペースのひとつである、国立本店(くにたちほんてん)[4]の活動に参画している。国立本店とは、東京都国立市を拠点とする「本とまちと人が行き交う場」である。2006年6月にオープンし、2012年9月からは「ほ

んとまち編集室」のメンバー約30~40名が企画運営している。本とまちに関連したイベントの企画やまちのイベントへの出店、フリーペーパーをつくるなど、本をテーマに、まちに開かれた気軽に立ち寄れる拠点を目指して活動している。

本稿では、コモンスペースが円滑かつ活発に運営されるためには、コミュニティへの参加意識が重要であり、参加意識を高める機能としてドキュメントの果たす役割に着目している。そこで、国立本店での活動を事例に、ドキュメント活用について整理し、地域社会・コミュニティに対する人々の態度や意識を示すコミュニティ意識尺度[5][6]の適用可能性を考察する。



図1 国立本店の室内風景

¹ 国立本店
Kunitachi Honten

2. プロジェクトデザインによる地域コミュニティづくり

2.1 プロジェクトデザイン

萩原によれば、プロジェクトのデザインとは、「自分たちのプロジェクトを立ち上げて育てていくこと」である[7].

通常のプロジェクトでは、短期的な目的のためにチームが生まれ、目的達成後は解散することが多い。チームメンバーがプロジェクトを通じて創り出すプロダクトは対価を支払うクライアントが使うもの、望むものであり、最終判断や権利もクライアント側にある。しかしながら、近年のプロジェクトは、クライアントの依頼に左右されずに、社会課題の解決や、地域性が高いローカルな活動に関する取り組みとして形成されることも多い。

一方、デザインとは、狭義には形や色や素材を決めたり、造形したりすることを指すが、近年では課題解決の手段としての計画や企画、仕組みづくりのことまで含めてデザインと定義することがある。

このような傾向に基づいてプロジェクトデザインを捉えるならば、社会課題や地域活動の解決・改善・持続可能性などを目的に活動内容を計画、企画し、実行していく取り組みと捉えることができる。

2.2 中央線デザインネットワーク

前述の定義に基づくプロジェクトデザイン活動のひとつに、中央線デザインネットワークがある[8].

中央線デザインネットワークとは、東京・JR 中央線の沿線に住んでいたり、働いていたり、好きだったりする人たちのネットワークである。東京駅から高尾駅までの 32 駅を足掛かりに、様々な活動を展開することで「地域と暮らしを楽しくする」試みである。

中央線デザインネットワークのメンバーは、建築家、プロダクトデザイナー、グラフィックデザイナー、ウェブデザイナー、イラストレーター、カメラマン、編集者、エンジニア等、専門的なフリーランスが中心である。中央線という路線の沿線で交流を深め、場合によっては地域に関わる仕事を増やすことで、中央線沿いに新たな地域のプロジェクトをデザインする取り組みである。プロジェクトは、地域を知り、地域の関係者との交流を大切にするという考えから、各駅に拠点をつくるというアイデアに基づいて構築されている。

以下に中央線デザインネットワークでデザインされたいくつかのプロジェクトを紹介する。

(1) 国立本店／本とまちの交差点

本稿では次項以降、取り組みを詳説する。

- 東京都国立市中 1-7-62

(2) 国立五天ノ住まないシェアハウス

国立市の富士見通り沿いのビルの3階～5階にある、「家族」をテーマにしたコミュニティスペース。「会話」「休日」「空間」「健康」「好物」という5つのキーワードを手掛かりに、国立家（くにたちけ）のメンバーを中心に企画運営している。「ただいま」「おかえりなさい」と気軽に言ってもらえる場所を目指して、イェノミ、シネマナイト、哲学酒場、ファミリーセールなど、様々な切り口のイベントを実施し、ゆるやかな交流を進めている。

- 東京都国立市中 1-10-12 天神ビル3、4、5階

(3) 国分寺さんち／デザインを活かした仕事を産む

国分寺駅徒歩8分、山の上にある国分寺さんちは、デザインの力を活かして地域に根差した仕事から暮らしに必要なヒト、コト、モノを生み出す活動拠点である。シェアオフィス「ちいきのデザイン制作室」、ゼミ活動「しごととデザイン研究室」、地域の様々な人とつながる「国分寺さんちネットワーク」の3つの活動を中心に、展示、ワークショップ、勉強会、交流会などを実施、よりよい地域を目指して活動している。

- 東京都国分寺市南町 2-8-7 半沢ビル2階

(4) 西荻ペーパーライノ紙とデザインの交流拠点a

2011年～2015年に活動した「西荻紙店」をベースとした、紙製品、パッケージ、チラシ、カタログ、書籍、雑誌、フリーペーパーなど紙を使った道具やメディアの可能性を試みるラボ。展示、販売、ワークショップなどを通じて、紙とデザインに興味のある人が交流する場になっている。

- 東京都杉並区西荻北 3-31-13-201

(5) マルヒノ／地図と写真とお酒とつまみ

日野駅から徒歩10分。2018年にオープンした立ち飲み屋。地図、写真、お酒、つまみをテーマに、だれでも立ち寄って話ることができる場づくりを目指している。1階は立ち飲みバーで、日替わりマスターによるトークもある。2階は地図と写真の企画室になっており、写真を展示するギャラリーも併設している。

- 東京都日野市日野本町 1-13-14

3. 国立本店のとりくみ

3.1 ほんとまち編集室

ほんとまち編集室は、国立本店というコモンスペースを運営するための組織であり、参加メンバーが日々話し合いながら、できることを模索し実践している。

国立本店を運営する参加メンバーは、編集やデザインの

a 2021年現在、活動は終了。

仕事をしている人、地域を良くするためにデザインを活かしたいと考えている人、街を歩き、街の成り立ちを知り、街の未来を考えるのが好きな人、国立を拠点に活動したいと思っている人、本の佇まいや存在感が好きな人、本やフリーペーパーをつくってみたい人、本と街のよい関係を模索したい人、これからの時代の働き方や暮らし方を模索したい人、など様々な考えを持つ人が集まっている。

編集室への参加は通年でいつでも可能であるが、活動に区切りをつけやすいように、毎年9月から翌年8月までを1期として活動している。現在は第9期であり、参加メンバーは大学生、主婦、デザイナー、エンジニア、農家、イラストレーター、ライター、詩人、編集者、絵本作家、大学教員、会社員、小学生など、様々なバックグラウンドを持つ人で構成されている。

3.2 活動内容

ほんとまちな編集室の主な活動内容は、次に示すとおりである。

- 「国立本店」の店番と企画運営
- 「ほんの団地」(大きな本棚)の企画運営
- 「まちの標本」(大きな壁面地図)の企画運営
- 本や日用品・雑貨等の企画・販売
- 展示やイベントの企画運営
- 「国立本店出版」の企画運営
- フリーペーパーや地図の企画制作
- 街のデザイン・編集の企画運営
- Webサイトの企画運営
- その他、本と街に関わる調査、企画、編集、デザインなど

国立本店では、参加メンバーが日替わりで店舗の店番をする。来店者に対し、どんな場所であるか、どのような企画に取り組んでいるかを紹介することで交流を行う。

ほんの団地とは、国立本店内に設置されている大型の本棚のことである(図2参照)。ほんとまちな編集室の参加メンバーは、一人ひとつの棚を利用することができる。メンバーは各々好きな本やものを並べて、自己表現が可能だ。例えば、自分が好きな本を1冊だけ表紙を向けて並べる人もいるし、作家志望の人などは、自分の創作を棚に並べることで来店者と感想を介したコミュニケーションをしている場合もある。また、ほんの団地ではメンバーが本棚会議を開き、定期的にテーマを決めて本棚づくりをする。テーマは多様で、会議に参加するメンバーの雑談から生まれることが多い。次に近年企画された本棚の例を示す(図3参照)。

- 本を使ってメンバーが自分自身のことを伝え共有する「自己紹介棚」
- 知的好奇心を大いに高めてくれる「ズカン本棚」
- 厚くて暑くて熱い本を紹介する「アツイ本棚」
- 今すぐ外に飛び出したいくなる「旅する本棚」

- 積まれた本と“言い訳”を展示する「積ん読の山」
- その日にまつわるオススメ本を紹介する「6月の読み暦」
- 夏のジメジメをヒンヤリさせる「こわい本」 など



図2 ほんの団地(大きな本棚)



図3 ほんの団地企画の例

他に、壁側面の大きな地図と実際の街のイベント類を連動させる「まちの標本」(図4参照)、ひとつのメインテーマと関連する「ほん」「まち」「ひと」を柱としたフリーペーパー「〇〇と」(図5参照)など、参加メンバーがそれぞれ表現したい企画を立ち上げ、あるいは企画に加わることで活動を推進している。



図4 まちの標本(大きな壁面地図)



図5 「〇〇と」フリーペーパー



図7 国立ポッポ祭

(左:作成したイベントポスター, 右上:銭湯絵のライブ・ペインティング, 右下:完成した銭湯ペンキ絵)

また、地域とのつながりから生まれる活動もある。例えば、昭和4年(1929年)に箱根土地株式会社によって開発された国立大学町(現国立市)に建設された文化住宅「旧高田邸」の解体に併せて企画されたさよならイベント(2015年、図6参照)では、イベントの企画のみならず、まちの歴史と解体前後の様子などをアーカイブし、カタログにまとめる活動を行っている。

国立市最後の銭湯「鳩の湯」においては、まちと銭湯をテーマにしたイベント「国立ポッポ祭」(2016年、図7)を開催し、国立市内在住の銭湯絵師によるライブ・ペインティングを実施した。

英国のアーティストのルーク・ジェラムが2008年より世界展開しているアートプロジェクト「Play me, I'm Yours」が国立市内で開催された際には、街中に置くピアノの装飾のみならず、ピアノ演奏に合わせて絵本の読み聞かせをするパフォーマンスを行っている(2018年、図8参照)。



図8 Play me, I'm Yours での絵本読み聞かせ



図6 旧高田邸プロジェクト

(左:アーカイブカタログ, 右上:高田邸外観, 右下:大正時代の衣装に身を包むイベント参加者)

3.3 ドキュメント活用の現状

前述した多様な活動を実行するため、ほんとまち編集室では、月に1回実施されるメンバーミーティング、個々の企画の立案や進行管理、日々の店番のシフト管理、店番による日誌(店番時に起こったことの共有)、外部からの連絡の伝達(来店者や電話などを通じた編集室へのことづて等)など、様々な情報が発生する。これらはそれぞれ適切なツールを介してドキュメントとして記録され、活動の促進に活用される。

例えば、ほんの団地の本棚企画「たまたな」[9](2020年8月)の立案から実施までを見てみる。

まず、ほんとまち編集室の定例のメンバーミーティングで本棚づくりについて議論される(2020年5月)。

ミーティングは対面の実ミーティング、あるいはオンラインウェブ会議ツールのZoomを用いて行う。ミーティングでは大よそのテーマが決まる。「たまたな」の時は、「お気に入りの一冊」がテーマであった。国立本店では、写真や動画の投稿をメインとするSNSツールInstagramを利用

し、それぞれのメンバーが每日一冊、本の書影を投稿する「本日の一冊」という企画を進行している。そこで、Instagramの「本日の一冊」と連動するように、メンバー個人がInstagramというデジタル空間で紹介した本を実際のリアルな本棚に並べ、お気に入りの本を紹介するという企画となった。

企画概要と議論内容は、ビジネスチャットツールのSlackに蓄積される。メンバーはツールへのアクセス権を持っており、議論内容の振り返りや、参加できなかったミーティングの議事（まとめてPDF形式でSlackに投稿される場合もある）を後から確認することができる。

2020年6月には、Slackを介して本棚企画への参加者をメンバー内から募集し、併せてこれまでInstagramに投稿した本の中からリアルな本棚を飾りたい本と、その本を選んだ思いについてコメントを集めることを行った。本の選択とコメント収集は、オンラインドキュメントツールのGoogleドキュメントのスプレッドシートを用いている。

7月には新型コロナウイルス対策に気を配りながら、店舗で前回の企画本と「お気に入りの一冊」本の入れ替えを行った。入れ替えは参加メンバーの各々好きな時間に本を持ち込んでもらい、個々に入れ替えてもらった。

また、「お気に入りの一冊」という企画名をより内容に即したものにするためのミーティングを行い、「たまたな」と改名した。Instagram由来の本と、リアルな世界でたまたな偶然に出会うことができる。そのような偶然の出会いを表現し、かつ、国立本店の場所が東京多摩地域にあることを掛け合わせて、「たまたな」としている。

加えて、店舗に置く紹介パネルおよび棚のコメントパネルを作成し、さらに国立本店ウェブサイトへの周知も併せて行った。

こうして、2020年8月から、本棚企画「たまたな」をスタートさせることができた。図9にたまたなの紹介ページを示す。



図9 ほんの団地「たまたな」

ほとんどまち編集室で取り扱う企画を図で示すと、次のようになる（図10参照）。

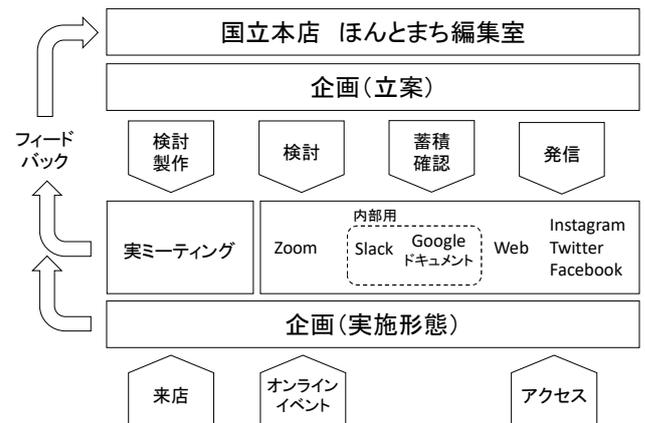


図10 企画立案から実施までの流れ

企画の検討、検討内容の蓄積・確認、パネル類の製作、外部への発信などにおいては、それぞれの工程で適切なツールを用いるものの、中心的にはSlackを用い、密接なコミュニケーションを取る。

Slack上ではチャットのようなフロー型ドキュメントと、議事録のようなストック型ドキュメントがバランスよく使われ、より円滑なコミュニティの運営が行われている。

4. コミュニティ意識尺度の適用可能性

4.1 コミュニティ意識尺度

地域社会やコミュニティに対する人々の態度や意識を明らかにしようとする研究は多く存在する。例えば、石盛らは社会心理学の立場から、コミュニティに参加する人々の意識を実証的に検討し、コミュニティ意識尺度を開発している[5][6]。

コミュニティ意識尺度とは、地域における行政の役割、市民の主体性に対する意識など、多面的な27項目からなる尺度である。近年では、ツールとしての使いやすさの観点から因子をよりコンパクトにした、12項目からなるコミュニティ意識尺度短縮版も開発されている。

先行研究においては、392サンプルに対して12項目を「1. そう思わない」から「5. そう思う」までの5段階の評定で回答してもらい、探索的因子分析を用いて4因子を導出している。すなわち、I 連帯・積極性（積極的にみんなと協力しながら地域の為に活動するかどうか）、II 自己決定（地域を良くするためには市民自らが決定権を持つことが重要であると考えるかどうか）、III 愛着（行政や他の熱心な人に地域の問題への取り組みは任せておいてよいと考えるかどうか）、IV 他者依頼（地域への誇りや愛着があるかどうか）である。これらの因子の相関を取ることによって、コミュニティ意識が定量化され、都市計画や地域のコミュニティづくりに応用されている。

表 1 にコミュニティ意識尺度（短縮版）の項目と、4 つの因子を示す。

表 1 コミュニティ意識尺度（短縮版）

因子	項目
I 連帯・積極性	A) 地域でのボランティアなどの社会的活動に参加したい。
	B) 住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい。
	C) 地域の人々と何かをすることで、自分の生活の豊かさを求めたい。
II 自己決定	D) 地域での問題の解決には、地域住民と行政が対等な関係を築くことが重要である。
	E) 地域をよくするためには、住民がすることに行政の側が積極的に協力すべきだ。
III 愛着	F) 地域をよくするためには、住民みずからが決定することが重要である。
	G) いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている。
IV 他者依頼	H) この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。
	I) 人からこの地域の悪口をいわれたら、自分の悪口をいわれたような気になる。
	J) 自分の住んでいる地域で住民運動が起きても、できればそれにかかわりたくない。
	K) 地域をよくするための活動は、熱心な人たちに任せておけばよい。
	L) 地域での環境整備は、行政に任せておけばよい。

4.2 コミュニティ意識尺度を用いたドキュメント活用のコンセプト

筆者らは、コミュニティ意識尺度を構成する要素をパラメータとして調節することで既存のメンバーや今後国立本店に参加してくれるかもしれない来客者に対して、参加意識を高めるドキュメントを開発できないか検討したいと考えている。

そこで、まず現在の国立本店の参加メンバーに対して、既存のコミュニティ意識尺度を適用する。

次に、適用した結果の分析を参考に、コミュニティ意識尺度の4因子に該当するドキュメントを設定し、設定したドキュメントを介して同様の分析結果が導くことができるか検証をする。

さらに、検証結果を分析することで、どのようなドキュメントがコミュニティの参加に有用であるか検討することを計画している。

表 2 に、仮設定しているコミュニティ意識因子とドキュメント例を示す。現状は参加メンバーに対するコミュニティ意識尺度の適用を行っていないため、適用結果によって設定ドキュメントを変更する場合がある。

表 2 コミュニティ意識因子とドキュメント

因子	対応ドキュメント
I 連帯・積極性	地域イベントの参加依頼を表現するドキュメント
II 自己決定	くにたち図書館との連携企画書
III 愛着	銭湯のような地域のランドマークとのコラボレーション企画書
IV 他社依頼	ほんまち編集室のメンバー募集に関するドキュメント

因子 I は、地域活動との関わりに関する項目であるため、地域イベントの参加依頼を表現するドキュメントを設定する。因子 II は、行政と地域を考える項目であるため、既に連携実績のあるくにたち図書館との連携企画に関するドキュメントを設定する。因子 III は、地域の誇りや愛着に関する項目であるため、銭湯や国立駅前の旧駅舎など、地域のランドマークとコラボレーションする企画に関するドキュメントを設定する。因子 IV は、他社にまかせる意識に関する項目であるため、これから参加しようとする人に安心感を与えるメンバー募集ドキュメントを設定する。

5. まとめ

本稿では、コモンスペースが円滑かつ活発に運営されるためにはコミュニティへの参加意識が重要であり、参加意識を高める機能としてのドキュメントに着目した。コモンスペースである国立本店での活動を例に、ドキュメント活用について整理し、コミュニティ意識尺度への適用可能性について基礎的な検討を加えた。

今後は、国立本店におけるコミュニティ意識尺度を図るとともに、コミュニティへの参加意識を高める機能を有するドキュメント開発に取り組んでいく予定である。

参考文献

- [1] 井上 岳, 原 里絵香, 櫻井 花, アルマザン ホルへ, 地域コミュニティのためのコモンスペースにおける設計と運営に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 2018, 83 巻, 754 号, p. 2453-2463.
- [2] 湯沢 昭, 地域力向上のためのソーシャル・キャピタルの役割に関する一考察, 日本建築学会計画系論文集, 2011, 76 巻, 666 号, p. 1423-1432.
- [3] 志村 誠, 池田 謙一, 地域オンラインコミュニティと地域参加に対して地域の構造要因が及ぼす影響の検討, 日本建築学会計画系論文集, 2008, 73 巻, 630 号, p. 1743-1748.
- [4] “国立本店”. <http://kunitachihonten.info/>, (参照 2021-2-22).
- [5] 石盛 真徳, コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加: コミュニティ意識尺度の開発を通じて, コミュニティ心理学研究, 2003, 7 巻, 2 号, p. 87-98.
- [6] 石盛 真徳, 岡本 卓也, 加藤 潤三, コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発, 実験社会心理学研究, 2013-2014, 53 巻, 1 号, p. 22-29.
- [7] 上原 幸子, 齋藤 啓子, 朝比奈 ゆり, 萩原 修, デザインとコミュニティ, 武蔵野美術大学出版局, 2018, 269p.
- [8] “中央線デザインネットワーク”. <https://www.facebook.com/cdnwk/>, (参照 2021-2-22).
- [9] “ほんの団地夏の本棚 たまたな”. <http://kunitachihonten.info/?p=3925>, (参照 2021-2-27)